

## 長浜曳山祭における三役の変遷とネットワーク

中野 洋平

長浜曳山祭の曳山狂言（以下狂言とする）は、役者である子供たちと、三役と呼ばれる大人たちの協業によって奉納される。三役とは、「振付」「太夫」「三味線」という三つの役務、あるいはその役を務める人物をさす。それぞれに大人一名があたる。振付は狂言の総合プロデューサーのような存在で、外題の決定から床本（台本）の作成にはじまり、配役の調整、衣裳の選定を経て、三月下旬からは一日中子供たちに付きつきりになって演技指導をおこなう。振付は芝居に対する知識と子どもたちへの指導力を要求され、歌舞伎の出来はそのまま振付の評価となった。太夫は振付の作成した床本を基に義太夫節を語る、いわゆる大歌舞伎の竹本にあたる。そして三味線がそれに合わせて、歌舞伎が出来上がる。太夫と三味線は三月下旬の「三役合わせ」以降練習に参加する。彼らの良し悪しも狂言にとって重要な評価である。

これまで、それぞれ専門的な技能を持ち、役者と同じく重要な三役については、具体的に考察されることが少なかった。ここでは彼らに焦点を当て、長浜曳山祭における三役とはどのような存在であったのか考察してみたい。

### ① 江戸時代の三役

長浜曳山祭における狂言の奉納は、少なくとも宝暦年間以降、江戸中期から行なわれていたという。現存する歴史資料からは、壽山・高砂山・萬歳樓・諫鼓山における文化三年（二八〇六）から嘉永五年（二八五二）

までの三役の所在地と氏名を知ることができる。江戸時代の三役は、「作者」「浄瑠璃」「三味線」といった。この三役に加え、外題によっては「鼓」や「長唄（歌）」が加わることもあった。まずはこの三役を所在地別にまとめてみたい。

### 長浜および近郊の近江国内

歴史資料上で初めて作者の所在地が確認できるのは、文化十一年（二八一四）の萬歳樓に出た「三田村 吉平」という人物である。三田村は彦根藩の預所であった浅井郡三田村（旧浅井町三田）と推定される。他にも作者では浅井郡尾上村（旧湖北町尾上）、同郡今庄村（旧浅井町今庄）、同郡徳山村（旧浅井町徳山）、蒲生郡日野町、長浜町の東御堂前町などが所在地である。

太夫では、文政六年（二八二二）の高砂山に出た「片町 長太夫」が初見である。片町は高砂山の山組である宮町組を構成する一町であるので、長太夫は自町の曳山へ上がったことになる。同じく長浜城下からでた浄瑠璃には宮町（高砂山）、東御堂前町（諫鼓山）、神戸町（孔雀山）などが確認できる。近江国内では彦根、坂田郡鳥羽上村（長浜市鳥羽上町）からもでている。

三味線は太夫と同じく文政六年の高砂山に出た「宮町 太郎助」が初見である。同じく長浜町では西御堂前町（諫鼓山）、近郊では浅井郡尊野村（旧浅井町尊野）や同郡高畑村（旧浅井町高畑）が確認できる。

### 京都

作者では文政六年（二八二二）の高砂山に出た「京都 民田」が初見である。ついで文政十一年（二八二八）、同じく高砂山の「京 太助」である。太夫では天保二年（二八三一）、高砂山の「京 山鳥」、嘉永三年（二八五〇）壽山の「京 半兵衛」が見える。三味線では天保二

年（一八三二）高砂山の「京 虎吉」、嘉永二年（一八四九）諫鼓山の「京 国蔵」が見える。

## 岐阜

作者や太夫は確認できないが、文政一一年〜一三年の高砂山では三味線を「岐阜 源蔵」という人物が務めている。他にも弘化二年（一八四五）の諫鼓山では「岐阜 鶴沢平助」が三味線であった。また、高砂山では文政一一、一三年に岐阜の「こりん」と「太造」という人物が「長唄」として参加している。

以上からこの頃の三役には、長浜近郊の浅井郡など近江国内の者が多くあつていった、ということがわかるだろう。加えて太夫や三味線では、自らの山組からでていた場合も少なからずあつた。近江国外では、京都と岐阜に限定されており、近江国内の三役と比して少数であるという点特徴的であろう。

それでは彼らは何者であつたのか。所在地と氏名以外に有効な歴史資料がないので、直接的な彼らの素性や活動等はわからない。しかし当時の歌舞伎や浄瑠璃、地芝居（村芝居）をめぐる環境を考慮すると、わずかばかり彼らの輪郭が浮かび上がってくる。

曳山狂言に限らず、町方や村方で、住民自身が主体となつて舞台に立つ芝居を「地芝居」といい、その成立は江戸中期の元禄から享保年間（一六八八〜一七三六）に求められる。住民たちは祭礼やハレの日にあわせて、歌舞伎や狂言を演じた。長浜曳山祭の狂言は、この地芝居の延長線上にあるといえよう。

地芝居に平行して町方・村方では、「買芝居」「請芝居」といって専門の劇団を雇って歌舞伎や狂言、操り芝居を観劇していた。このとき雇われた劇団は、全国の土地土地に拠点を置いた地役者や旅役者である。

地芝居で住民自ら歌舞伎を演じる場合、もちろん独学でおこなうこともあつただろうが、芝居に関する知識や演技に必要な技能は、地役者や旅役者など専門家を雇うことで身につけていた。買芝居の対象となつた彼らが「師匠」や「作者」となった。歌舞伎に必要な太夫や三味線についても同様で、地芝居の上演には専門の演奏者を依頼している。

長浜曳山祭に目を転じると、京都からの三役は、このような上方で活躍していた役者や浄瑠璃語りであつた、と考えられるだろう。また岐阜も、早くから専門の振付や太夫が存在していた地域であつた。ただし彼らを雇つたのは、高砂山など京都に独自の縁を有していたと思われる山組に限られていたようで、ほかの山組のほとんどは、近郊の近江国内から三役を迎えている。では彼らも、専門者であつたのだろうか。

ここで考えられるのが、素人の愛好者たちであつた可能性である。専門の役者や演奏者から知識や技能を習得した町方村方の住民が、自らの祭礼や他所に向いて専門者と同様の指導や演奏を担任する場合があつた。一般に地芝居では、近世後期になるほど、半プロ的な素人愛好者が多く出現している。幕末から明治大正にかけてのことだが、三河および東美濃一帯では「万人講」という独自の素人芝居愛好者集団が活躍していた。彼らは専門の役者を招致したり、自らが役者と師弟関係を結んで演技指導を受け、それを地芝居のなかへ還元していたのだという。

太夫や三味線も、舞台へ上がる専門の演奏者が素人と師弟関係を結んで講習させることは、すでに宝永初年（一七六四）頃からみえ、後に広く庶民へ浸透した。素人は師匠の自宅などで手習いを受け、その流派によって、太夫ならば「竹本」「豊竹」、三味線ならば「鶴澤」という姓を名乗つた。平素は浄瑠璃会と呼ばれる愛好者の集まりにおいて

技能を披露し合った。長浜の山組から浄瑠璃や三味線を務めた者たちは、まさにこのような愛好者であったと考えられるのである。

## ② 戦後の三役

つぎに、昭和二五年に長浜曳山祭が復活した以降の三役の諸相を見てみたい。別紙に山組ごとの三役をまとめた。江戸末期には素人愛好家が多かった三役だが、明治大正期を経て第二次世界大戦後になると、その様相は一変する。三役から、愛好家たちの姿が少なくなるのである。

### 戦前のなごり

復活から昭和三〇年代初めまでは、戦前からの名残だろうか、振付に三柳源九郎・嵐冠十郎など、京都大坂の上方歌舞伎で活躍していたと思われる人物があたっている。太夫では長浜市相撲庭（旧浅井町）の豊竹常盤太夫（宮川清七）氏、三味線では長浜市湖北町河毛（旧湖北町）の伊吹甚造氏など、長浜近郊からの参加があった。復興に際しては、伊吹氏の尽力が大きかったという。

### 岐阜県下の振付

これ以降、三役には市川延一郎氏や松本麗蝶氏・市川延次郎氏・大谷広右衛門氏などの振付が、昭和を通じて参加することになる。彼らは岐阜県下を拠点として各地の地芝居へ歌舞伎を教えていた振付たちであった。昭和三〇年代から五〇年代の狂言は、彼らが支えていたといっ

てよい。  
岐阜県は江戸時代から地芝居の盛んな地域である。岐阜県下の農村舞台数は、存廃数合わせて二六四棟と、兵庫県・長野県とともに全国屈指の地芝居隆盛地であった。そして地芝居に関係する振付（岐阜では師匠という）や太夫・三味線・衣裳屋も多く存在していた。

西濃の各務原市の地芝居では、戦前まで岐阜市や関市から衣裳を借りていた。しかし戦後になると関市中之保の市川延一郎氏から借りるようになったのだという。この人物は昭和三一年から昭和四一年まで、春日山や萬歳樓で活躍した振付であると思われる。同じころ翁山や高砂山・諫鼓山で振付をしていた大谷広右衛門氏は上方歌舞伎の大谷一門の出で、各務原に「大谷興行」を興して近隣の地芝居の指導にあたり、衣裳を貸し付けている。ちなみに平成九年の狸々丸の振付であった大谷白菊氏は彼の妻である。

大谷広右衛門氏の紹介で、昭和三四年から平成三年の長きに渡って孔雀山や鳳凰山で振付として活躍したのが、市川延二郎氏である。彼は岐阜市柳ヶ瀬で人形店を営んでいて、役者の顔を作るのが上手だったという。延二郎氏と同じく昭和三一年から平成二年まで振付だった松本麗蝶氏は関市の人で、刃物屋を営みながら、長浜以外にもあちこの地芝居に出向いていたという。

岐阜県下の振付たちは役者経験者・衣裳屋・自営業などさまざまであるが、彼らは共通して、まず岐阜各地の地芝居に振付として参加していた者たちであった。そこでは振付が太夫や三味線を指定するのが通例であったようで、彼らと共に長浜で活躍した太夫・三味線も、岐阜県下に拠点を置く者たちであったと考えられる。また一般に岐阜県の地芝居は昭和三〇年代を境に衰退していったという。それと入れ違いに長浜へ振付たちが参加し始めたことは興味深い。

### 小芝居・中歌舞伎からの参加

岐阜の地芝居関係者を皮切りに、長浜の三役は他の地芝居関係者へ広がっていく。たとえば昭和五一年から参加している竹本太夫氏は岡山の地芝居の太夫、同五八年からの豊澤仙右衛門氏は淡路の人形浄瑠

璃の三味線、平成二年に春日山で振付をした中村和歌若氏は兵庫県の播州歌舞伎の出身だという。そして昭和四〇年代後半になると、地芝居関係者以外の者が三役を務めるようになる。彼らは、小芝居・中歌舞伎と呼ばれる劇団の人々であった。

江戸時代、芝居興行は常設舞台をもち官許を受けた「大芝居」と、その都度小屋掛けし、常設の舞台を持たない「小芝居」とに分けられた。明治に入り、大芝居は国家や松竹の保護のもと発展し、歌舞伎の場合は大歌舞伎と称するようになった。それに対して地方を拠点とし、神社祭礼や農村舞台など様々な場で興行した小芝居が、中央の大歌舞伎に比して中歌舞伎と呼ばれた。明治から昭和初期にかけて全国に大小さまざまな劇団（一座）が展開し、庶民の娯楽として中歌舞伎が親しまれるようになる。

長浜曳山祭に参加した中歌舞伎出身者として、太夫の豊澤重松氏、振付の中村芝蝶氏・市川升十郎氏・中村福太郎氏・市川団四郎氏などを挙げることができる。重松氏と芝蝶氏は同じ一座で地方をまわっており、升十郎氏はかつて「市川少女歌舞伎」を主催した人物である。市川少女歌舞伎は愛知県の豊川稲荷門前近辺の子女が歌舞伎を習ったのがきっかけとなった。その後、静岡県内の浜松座で公演をおこない、十代目市川團十郎の後押しを受けた彼女らは、東京へ進出していく。

中村福太郎氏と妻である岩井小紫氏も同じ劇団に属していた。福太郎氏は京都、岩井氏は愛知県岡崎の出身である。岩井氏の実父である澤村田左衛門氏は役者でありながら太夫元（興行主）でもあり、総勢六〇名からなる劇団を有し、全国の劇場を巡回していた。劇団には役者や太夫・三味線のほか、衣裳・床山・大道具小道具まで含まれており、芝居にかかわるすべてを自らでまかしたという。しかしほかの

中歌舞伎と同じように、昭和三〇年代以降、各地の劇場が映画館に改装されるなどして上演の場を失い始め、昭和四九年に劇団は解散したという。その後、夫の福太郎氏は豊澤時若として松竹の大歌舞伎に入り、竹本三味線方として活躍した。団四郎氏は岩井氏の実弟であり、北海道で活動していた初代市川團四郎の婿となって跡を継いでいる。

### 大歌舞伎・三役修業塾出身者

中村福太郎氏が劇団解散後に大歌舞伎へ入ったように、中歌舞伎と大歌舞伎は断絶した間柄ではなく、常に相互交流があった。大歌舞伎で役に恵まれない役者たちが、活躍の場を求めていったという。こういった関係からか、昭和五〇年以降、長浜曳山祭へは大歌舞伎出身の三役も参加するようになる。とくに、独立行政法人日本芸術文化振興会がおこなっている養成事業を修了した者の参加が多くなっている。また松竹関西演劇部所属の水口一夫氏の参加も、狂言の発展に寄与した。

平成二年に開講した三役修業塾は、先に記した地芝居や中歌舞伎出身の三役が高齢化したこともあって、自前の三役を養成する目的で設立された。平成九年には三味線の豊澤賀祝氏が初めて鳳凰山へ上がり、以降、龍三氏・勝二郎氏が続いている。太夫では平成七年に大家千永氏、平成九年に西邑粹龍氏、平成一二年に竹本龍一氏、平成一五年に竹本龍豊氏、翌年には竹本千永氏、同二三年に竹本甚太夫が参加している。振付では平成一五年から川村和彦氏が参加されており、今後も三役修業塾生の活躍が期待されている。

### ③ 三役の変遷とネットワーク

以上まで、江戸時代後期から現代までの三役の諸相を考察してきた。その変遷をまとめると、江戸時代後期には長浜および周辺の素人愛好

者、戦後すぐには上方歌舞伎出身者および長浜周辺のセミプロ、昭和三〇年代からは岐阜県下の地芝居関係者、ついで中歌舞伎の劇団関係者・大歌舞伎・養成所出身の者、平成に入ると三役修業塾生、という流れが見えてくるだろう。これらの人々が重層的に関係し合い、三役が務められてきたのである。

江戸中期と明治・大正・昭和初期が不明であるが、他地域の状況を参考にする、江戸中期は、素人愛好者の前段として旅役者や地役者の専門者が務めており、明治大正期には素人愛好者が減少し、再び専門者が増加していた、と考えることができるだろう。

個々の三役の変遷をみると、同じ三役が長く務めるケースは戦後昭和四〇年代に入ってから顕著になる。各山組による三役の決定は、山組と三役の個人的関係に基づくため、定められたルールはない。当然山組は腕の良い三役を求め、外題の持ち手が少ない、演出が合わないなどの場合は、すぐにほかの三役をあたる。常に新鮮な芝居を求める山組からすれば、三役は定期的に変更しておいた方が好ましいだろう。そしてなにより、かつての長浜の周辺には、三役を務めることができる人材（素人玄人織り交ぜて）が多く存在していたのである。昭和四〇年代以降の状況は、三役のなり手が減少したこととも関係があるかもしれない。

また戦後のことであるが、新しい三役を他の三役の紹介によって決定する、という場合が多くみられる。これは振付が太夫や三味線を紹介する場合もあれば、逆に三味線が振付を紹介することもあった。例えば振付の中村芝蝶氏は太夫の豊澤重松氏の紹介である。これは重松氏の劇団に芝蝶氏が所属していた関係によっている。中村福太郎氏が参加したのも、義弟である市川団四郎氏の紹介からである。このように

それぞれの三役は、同じ劇団であるとか、同門の師弟関係、同じ地芝居の関係者など独自のネットワークを有しており、そのつながりにおいて互いを紹介しあうのである。これは衣装屋も同様で、たとえば青海山を担当するK衣装店は、市川少女歌舞伎出身者が設立したものであり、長浜には振付で市川少女歌舞伎設立者の市川升十郎氏とともに参加するようになった。

長浜曳山祭の三役や衣装屋は、米原曳山祭、垂井曳山祭りなど、ほかの狂言にも関与するほか、基本的に大人が演じる各地の地芝居でも活躍している。彼らの活動にとって、長浜はその一つでしかない。いくつもの芝居を担当するなかで、三役たちは経験値を上げ、他の芝居へ還元していくのである。また最近では、三役修業塾生がよその祭礼に出かけるなど、長浜の芸が、他の芝居に影響を与えるようになってきている。

1 『長浜曳山祭総合調査報告書』長浜市教育委員会、一九九六、三三二頁

2 守屋毅『村芝居―近世文化史の裾野から』平凡社、一九八八

3 安田徳子『地方芝居・地芝居研究―名古屋とその周辺』おうふう、二〇〇九

4 武内恵美子『歌舞伎囃子方の楽師論的研究』和泉書院、二〇〇六

5 岐阜女子大学地域文化研究所ホームページ「地芝居について」<http://chibunken.sci.jodai.jp/chishibai/>

6 注5に同じ。

7 注5に同じ。